

しなやかに生きる 大学は知の宝庫

一東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2022一

社会貢献委員会

要 約

本学は毎年、社会貢献委員会の主催で公開講座のシリーズを実施している。本学の教員は地域住民のために自分の研究分野に関連する生活に役立つ情報を提供している。今年度のシリーズのテーマは当たり前となったさまざまな生活の要素を積極的に考えて生きることだった。

これらの公開講座の記録を今まで本学のホームページで公開してきたが、講演は授業でも学会発表でもなく、教員の研究の成果になっている。一昨年度から研究の記録をこの研究年報でも報告することにした。

キーワード：公開講座，SDGs，ルワンダ，健康増進，ヘイトスピーチ，脳科学，コミュニケーション，教育史，飛行機，
シヨスタコーヴィチ

第1回 持続可能な社会を目指して ～アフリカ・ルワンダ～

講師：デュアー 貴子（本学教授）

10/4（火）13:30～15:00

今回の講座では、2015年9月の国連総会にて2030年までに全ての人が達成すべき持続可能な開発目標（SDGs）として17の世界的な目標が採択され示されたことに関連して、人類が今までどの様に環境破壊に関わってきたのか、その簡単な歴史を振り返りながら、具体的な例としてアフリカ・ルワンダ共和国でジェノサイド前後から現在に至るまでの様子など多岐にわたって詳しくお話していただきました。その上で我々が今すぐSDGsに取り組むことの大切さや、今後どのように取り組んでいったらよいのかなどを東海学院大学学生の関わりも多少交えながら講演していただきました。

最初に、環境破壊の歴史について非常に興味深いお話をしていただきました。

我々人類が行ってきた環境破壊の起源は古く、古代4大文明の一つメソポタミア文明が栄えた頃までさかのぼり、このころにはすでに人口が集中し都市が形成され、そこに暮らす人々の食料を満たすためには新たに農耕地の開発が必要でした。そのため、人々が暮らす都市の周辺では森林の伐採すなわち環境破壊が始まっていたと考えられています。

この事は、古代メソポタミア時代に書かれ、現存する最古の叙事詩といわれているギルガメシュ叙事詩に人

類史上最も古い森林破壊の例として記載されています。

この物語の内容は、当時の都市国家ウルク市の王ギルガメシュが人々の幸せのため、森の守り神フンババを退治して森林を伐採、近代都市国家の建設を進めたというものです。一方で、人類史上最初の森林破壊を進めた事を書いた物語としても注目されています。この物語で登場する良質なレバノン杉の乱伐はその後も続き、今では保護によりかろうじて残すのみになっています。今後、この乱伐された森林の再生には多くの歳月を必要とすることが判っています。その後、18世紀になると、イギリスから始まる産業革命による急速な進歩と発展は人々に多くの恩恵をもたらすと同時に多くの環境破壊を今まで以上の速さで推し進める結果となります。これについては、ドイツにある広大な森シュヴァルトツヴァルト（黒い森）において発生し、その後、周辺諸国まで広がる酸性雨による森林破壊を具体的な例の一つとして紹介していただきました。やがて1970年代になると、環境破壊の実態は人工衛星によってより明らかになっていきます。この様に人類が今まで繰り返してきた環境破壊について、古代の歴史から近代の具体的な例にも触れながら講演していただきました。

続いて、人口の急速な増加が環境破壊に及ぼす影響についても具体的に講演していただきました。

世界人口は1950年代頃から急速に増加しはじめています。今後もアフリカ、インド、東南アジア、中南米などの途上国では人口の著しい増加が予想されており、

2022 年中に 80 億人に達する見込みの人口は、今世紀末には 110 億人に達するとの報告もあります。

歴史上、人口の増加は農地開発による食糧確保のため森林伐採を促し、やがては気候変動による自然災害や土地の荒廃をもたらす結果となっています。このことに関連して、特にアフリカのサヘルと呼ばれている地域に注目してお話ししていただきました。サヘル地域とはアラビア語で岸边や沿岸を意味し、サハラ砂漠の南側を大西洋から紅海まで帯状に広がる広大な地域をさします。かつては自給自足が出来、豊かで平穏な暮らしを送っていましたが、1950 年以降は人口が急増、さらに地球温暖化の影響もあって、1970 年前後から今までに経験したことのない深刻な干ばつに繰り返し見舞われた結果、非常に多くの人々が飢餓等により命を落とすに至った地域です。スーダンにあるハルツーム大学によりますと、飢餓や干ばつは環境破壊による生態系の崩壊が原因と考えられています。この様に、この地域一帯では貧困や飢餓、干ばつなど数多くの深刻な問題を抱えていましたがようやく、1984 年国連食糧農業機関 (FAO) による調査が行われ、その結果、アフリカの 52% の国々が飢餓状態であることがわかり、飢餓や貧困撲滅のための援助が開始されています。

これらのアフリカ全体で抱える問題については、今回は特に中央アフリカに位置するルワンダ共和国に注目してお話ししていただきました。ルワンダ共和国は牧畜民であるツチ族と農耕民であるフツ族に分けられますが、1899 年から続いたドイツ領から 1919 年ベルギー領になった後、統治のしやすさから、単なる顔立ちにより両民族に分けられたいきさつがあります。ベルギーは当初ツチ族を優遇し、かわりにフツ族を隔て民族を分断していきます。その後、ルワンダ共和国では 1950 年代から人口の急増が始まり 1994 年にジェノサイドが起きる頃までに人口は 4 倍程度まで膨れ上がります。この間、農地不足、食料不足から農耕民であるフツ族による農地開拓のための森林破壊が繰り返されます。その結果、ジェノサイド直前には国立公園以外の森林がなくなるほどとなり、大規模な土壌流出を引き起こす原因となったりもします。さらに都市への人口集中による失業者の増加、治安や経済状態の悪化等から絶対的貧困層 (1990 年当時の定義で 1 ドル/1 日以下の収入) の割合がジェノサイド直前には全国民の 75% 程度まで占める結果となりました。一方、第二次大戦以降、多数派であったフツ族が政権を握ると、ツチ族は近隣の国々へ逃れ難民化す

ると同時に祖国への返り咲きを願い RPF (ルワンダ愛国戦線) として組織化していきました。その後、1994 年にフツ族のハビヤリマナ大統領が RPF により暗殺されたのを契機にフツ族がツチ族等を短期間に大量虐殺するジェノサイドがおきます。ジェノサイドから逃れようとする人々が近隣諸国の難民キャンプ周辺において食料不足を補うため、森林伐採や貴重な動物であったカバやマウンテンゴリラ、ライオン等を捕獲しました。このような悲劇の後、2000 年にポールカガメ大統領が就任し、その手腕もあって、今では奇跡的な復興を成し遂げようとしています。

今回は、学生がルワンダ共和国での健康調査や栄養調査をする際に交流がある学校についても詳しく紹介していただきました。ルワンダ共和国では、いまだに多くの生徒は 1 日に 1 食程度摂れば良い方で体調不良となる子も多く、この厳しい現状を政府関係者に報告し、更なる支援が必要と訴えた結果、ようやく 2022 年に給食室が出来ましたがまだまだ不十分な状態です。大統領も経済発展や学費の小中高無償化など教育改革にも取り組んでいますが食糧事情はなかなか良くならないというのが現状です。昨今のコロナ禍でさらに悪化しています。

1960 年代までは豊かな農業国であったルワンダ共和国が食糧事情の悪化や環境破壊を端に発して 1994 年のジェノサイドを招き、その後の復興から現在のルワンダ共和国の様子に至るまでの複雑な歴史的背景、東海学院大学の学生による支援等も交えながらの講演は非常に興味深く、今まで比較的なじみの薄かったルワンダ共和国に対して身近に感じる事が出来ました。

講演時間も残り少なくなってきましたが、最後に同じアフリカでルワンダ共和国の比較的近くに位置するケニア共和国では、1970 年代から長年にわたりグリーンベルト運動 (植林) を続け、その後ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ氏が 2005 年に来日した際に、日本語の MOTTAINAI という言葉に感銘し、その後 MOTTAINAI 運動をひろめられました。日本にはこういった MOTTAINAI 精神があります。

SDGs 達成目標の 2030 年はすぐそこに迫ってきており、どんなに小さなことからでもよいので一人一人が今すぐに取り組み、そして持続する姿勢がより重要であると訴えられました。

講演後には多くの方々質問等に演台の方に来られ、聴衆の皆さんの SDGs 達成への関心の高さを体感することも出来ました。

(文責：杉下 毅)

第2回 楽しく運動、健康増進！ ～健康寿命を延ばす第一歩！～

講師：竹内 隆司（本学講師）

10/13（木）13:30～15:00

令和4年度第2回公開講座（受講者38名）が10月13日に本学東キャンパス体育館で開催されました。健康福祉学部総合福祉学科の竹内隆司先生は、中学校教諭一種免許（保健体育）、高等学校教諭一種免許（保健体育）の資格者を育てておられ、教育研究論文の優秀賞を取得されるなど、教育・福祉・スポーツの幅広い分野で活躍をされています。

今回の「楽しく運動、健康増進！～健康寿命を延ばす第一歩！～」と題された講演は、今、話題のフレイルを元に健康寿命の延伸について話され、「元気があればなんでもできる！」で有名なアントニオ猪木氏とのエピソードなど織り交ぜながら、難しい内容も分かりやすく取り組める講演でした。現在の平均寿命と健康寿命を具体的に数値で示され、自分の体を知り、自分の体をどこまでどのように留めるか、個人生活の質のUPをしなければ、とあらためて考えるヒントとなる興味深い話題を提供するものでした。印象に残った話題をいくつかご紹介します。

フレイルは、Frailty（虚弱）が元となっており、その3要素として、身体の虚弱、心・認知の虚弱、社会性の虚弱があげられ、健康には栄養バランスの取れた食事、定期的な運動習慣、質の良い睡眠など、総合的に対応する必要があります。今回は、食事や睡眠、社会参加などに触れつつ、「運動」を中心にお話いただきました。少し筋肉量が落ちるサルコペニアからフレイル、要介護に至る流れから、単に筋力や身体能力が低下している状態のみでなく、基礎代謝やエネルギー消費量の低下、食欲の低下等、様々なリスクにつながる事が示されました。日常生活が制限されず、日々を健やかに過ごすために必要な健康長寿の3つの柱からまず自分自身で自分の体を知ることから始めました。フレイルチェックとして、「指輪っかテスト」と「イレブンチェック」（栄養、口腔、運動、社会参加）をまず自分でチェックをしたのち、新体力テストやレク式体力チェックなどで具体的に体を動かし、開眼片足立ち、ツー・ステップなど、どのくらいできるのかを自分で確認をしました。平均と比較し、自分の下肢や体幹の筋力、バランスや柔軟性など、数値で見ながら自分で記入し記録することで、自らの体と日常生活を再考することができ、日々実行することの重要性が喚起されました。

時々笑いを取り交ぜながらのお話で、参加者は笑顔になりながら、自分のチェックをして気持ちが盛り上がったところで、実際の運動をいくつか体験をしました。6名前後のグループになり、歌に合わせての手足の運動と頭の体操、ボールや風船などの用具を使つての運動など、どのグループも楽しそうに和気あいあいと取り組んでいました。隣の人とゆっくりとしたリズムで手を合わせたり、触れ合ったりしながら同じ時間を過ごし、複数人で1つのことをやったり、競争をして本気を出したりすることで、知らない人とも運動を通して仲良くなり、笑ったり話したり、お互いを思いやったり、こうやったらと意見を出すなど、楽しい中に体も脳も活性化されていきました。グループで行うことにより、フレイルの要素である社会性などにも刺激を与え、気分転換やストレス発散などにより心も豊かになる体験をしました。受講生の方の本当に楽しそうな笑顔で体験されているのを見て、飛び入りで参加した私自身も心が元気になっていくのが分かりました。運動と心や社会参加などは相互作用があり、免疫力の向上などにも繋がることを考えさせられました。

受講後の質疑応答では、「ファンクショナルリーチの意味は？」「どうやってチェックするのですか？」「フレイルの意味が分かった」など活発な質問が出て、受講者の方々の意欲にもつながっていると感じられる講座でした。

（文責：長瀬 啓子）

第3回 ヘイトスピーチと表現の自由

講師：山邨 俊英（本学講師）

11/3（木）13:30～15:00

令和4年度第3回公開講座（受講者32名）が11月3日（文化の日）に本学図書館大セミナー室で開催されました。

今回の講師である人間関係学部心理学科の山邨俊英先生は、憲法学を専門とし、関西アメリカ公法学会・中四国法政学会などに所属され、ヘイトスピーチに関する論文を多数執筆されています。また、本学において、日本国憲法・医事法・社会保障法などを学生に教授され、公認心理師をはじめとした専門職の養成にも携わっておられます。

今回の「ヘイトスピーチと表現の自由」と題された講演では、近年、社会的関心が高まっているヘイトスピーチについて、表現の自由の保障との観点から深く掘り下げてお話を下さいました。ヘイトスピーチとは、「対象となる者を人種、民族、宗教等の属性・アイデンティティ

に基づいて罵ったり、貶めたり、社会からの排斥を主張したりする表現」¹のことを指します。

講座では最初に、日本におけるヘイトスピーチ対策の現状を確認しました。2010年代以降、在日コリアンに対するヘイトスピーチが社会問題化したことをきっかけに、2016年にはいわゆる「ヘイトスピーチ解消法」という法律が制定され、また一部の地方公共団体ではヘイトスピーチ対策を含む条例が制定されるなど、日本のヘイトスピーチ対策には一定の進展がみられます。しかし、現在、日本に存在するヘイトスピーチ対策の法制度は、原則として、ヘイトスピーチを罰することを目的としていません。そのため、ヘイトスピーチ対策としての有効性には疑問が提起されており、さらなる対策が主張されているそうです。

そこで次に、さらなるヘイトスピーチ対策について考える前提として、表現の自由が重要である理由について説明されました。表現の自由は、自由主義・民主主義や真理の追究にとって不可欠なものであり、また規制によって萎縮しやすいものであるという理由から、安易に制限されてよいものではありません。このような表現の自由の重要性を踏まえて、表現の自由に対する規制は、規制がどうしても必要な事柄に限って、必要最小限度で行うことが求められます²。ヘイトスピーチは、標的とされた人々に不安感や嫌悪感を与えるだけでなく、深刻な精神的・身体的害悪をもたらし、社会での差別意識を強化することにつながります。そのため、規制の必要性は認められやすいところですが、表現規制よりも緩やかな対策が存在するのであれば、そちらを優先すべきだとされているそうです。

以上から最後に、ヘイトスピーチに対する表現規制以外の対策が紹介されました。1つは、「ヘイトスピーチ解消法」・「部落差別解消法」・「障害者差別解消法」など、バラバラに定められている差別禁止法を統合した包括的な差別禁止法の制定、もう1つは、ヘイトクライム(差別的な動機による犯罪行為)に対して刑罰を加重するヘイトクライム法の制定です。

受講後の質疑応答では、哲学・倫理学を専門とする心理学科の小椋先生が多くの問いかけをされました。その問いに対して山邨先生は、私たちにも理解しやすいように、レジュメを確認しながら一つ一つに丁寧に解説を下さり、受講生の方々も熱心にメモを取り、真剣な眼差し

で聞き入られていました。両先生による問答は、温かで優しさのあるやり取りであり、「互いの人権を尊重し合う社会を共に築く」ために議論をすることの重要性を感じさせるもので、時間があつという間に過ぎていきました。

この体験は、まさしく今回の講座題名である「しなやかに生きる～大学は知の宝庫」そのものであり、自己の人格をしなやかに発展させたいとあらたに考えるきっかけとなる講座となりました。

(文責：長瀬 啓子)

第4回 脳科学で考える、人との付き合い方 ～思い込み、偏見で人を判断してしまえば、世界は狭くなる～

講師：生島 嘉人(本学准教授)

11/11(金) 13:30～15:00

本日の講師は他人とのコミュニケーションの中で、感覚から認識へのプロセスと、その過程で生まれうる思い込みや偏見について話しました。

我々は五感を通じて世界についての情報を取り入れています。その五感は簡単に騙されます。人は感覚で受けた情報を経験に照らして解釈しますので、実際の状況より思い込みが優先することがあります。たとえば、今のマスク生活では人の表情がよく見えないため、コロナ禍による対人付き合いに様々な規制があり、話を理解する手がかりが少なくなっています。したがって、話し合っているときに、我々は思い込んでいる可能性があることを意識しないといけない、と講師は話しました。

講師いわく、「コミュニケーション」は情報の伝達や連絡、通信だけではなく、意思の疎通や心の通い合いという意味でも使われることを話しました。人間は言語のほかに、身振りや画像などの物質的記号も媒介手段にして、精神的交流をしています。

初めて会う人とのコミュニケーションは特に難しいです。威圧感のある人、見た目が怖い人、格好が異様な人、外国人など、自分と違う人には話しかけにくいです。我々は外観や雰囲気でのコミュニケーションができそうか判断しがちです。しかし、その先入観に注意しないとはいけません。「脳は意外とうそをつく！」と講師は言います。人間は思い込みのほかに、勘違いや誤解、錯視・錯覚、物忘れ、手品などに弱いです。

¹ 梶原健佑『『お前ら日本から出ていけ』と叫んでもいいですか?』宍戸常寿編『18歳から考える人権』(法律文化社、第2版、2020年)44頁。

² 志田陽子『「表現の自由」の明日へ——一人ひとりのために、共存社会のために』(大月書店、2018年)140頁。

講師は感覚と知覚と認知の違いを説明しました。「刺激を受容し、中枢でそれを認めることを感覚(sensation)といいます。質や強さを区別し、それらの時間的な経過を認めることを知覚(perception)といいます。いくつか知覚を総合して、知覚されたものが何であるかを認める中枢のはたらきを認知(recognition)といいます」感覚を正確にとらえ、知覚しないと、誤った認知につながるというわけです。人間の感覚について、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚のいわゆる五感のほか、受容器が特殊化していない痛覚や圧覚、温度感覚、前庭覚、内臓感覚などもあります。しかし、その感覚を知覚と認知につなげていくためには、発達が必要です。(ここから、講師は話を見ることに限定して進めました。)見ることは「目で」「手で」「肌で」「舌で」「音で」という感覚を総動員して「知覚・認知」し、フィードバックを受けて発達します。また、左右の目はそれぞれ脳の反対側に情報を送りますが、複雑につながっている中枢で処理されます。受け入れたイメージを過去の経験や常識、自分の願望などに照らしながら、環境情報や人からの意見、自分の想像を加味して知覚しますので、誤解することがあります。これはいわゆる「見る」と「見える」の違いだと考えてもいいです。

我々ほどの条件で騙されやすくなるかを理解してもらうため、講師はここで様々な錯視画を見せました。遠近感覚、輪郭の見方、画像の変化など、脳が期待する約束を破る画像を見て体験した受講生は、簡単に騙されていることに驚きました。

人の視覚認識には「見付ける力」と「見分ける力」というメカニズムが働かないと正確な認識ができません。しかし、期待や思い込み、情報の省略などのためのステレオタイプがメカニズムを狂わせます。偏見が生まれやすいことに気を付けなければなりません。

最後に、講師は表現について話しました。表現とは一般的には「意識をもって自分自身からアウトプットされること」といいます。歌や踊り、イラスト、絵、料理、言葉などは「表出」といい、自分の感覚を外部に出すことですが、表現はそれに加えて、ある目的意識をもって言葉などを利用することです。つまり、コミュニケーションは表現です。自分が行う表現は対象者のニーズに合わせて多くの技法を使います。逆に、自分で見る表現では、対象者の反応を観察し、身体表出と感情を見抜くことが必要です。人は相手の表現を感情を通して脳に取り入れますが、さまざまな理由で正確に知覚・認知されないこ

とがある、ということを常に意識しなければなりません。コミュニケーションは思い込みと偏見を避けることにかかっています。

(文責：アンドリュー デュアー)

第5回 歴史からみる子ども・若者の多様な困難に向き合った教師・学校

講師：石井 智也(本学講師)

11/17(木) 13:30~15:00

令和4年度第5回公開講座(受講者26名)が11月17日に本学図書館大セミナー室で開催されました。

今回の講師である人間関係学部子ども発達学科の石井智也先生は、特別ニーズ教育、特別支援教育を専門とされ、本学では「特別支援教育(幼・小・中・高)」、「発達障害児教育総論」、「重複障害児教育総論」などを学生に教授され、特別支援学校教諭をはじめとした教師・専門職の養成にも携わっておられます。

今回の「歴史からみる子ども・若者の多様な困難に向き合った教師・学校」と題された講演は、2019年に東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科より博士(教育学)学位を授与された学位論文「明治・大正期の東京市における初等教育の成立・普及と「特別な教育的対応・配慮」に関する歴史的研究」に基づくものであり、先生が長年研究を重ねてこられた分野を、私たちにもわかりやすくお話を下さいました。

講座では最初に、学制は、明治5年に全国に公布された近代的学校制度を定めた法規で、この実施により、全国にまず初等教育機関である小学校が設置されていたこと、そして、小学校令により教育課程や教育内容などを定める各種規則が制定され、市町村の学校設置義務、保護者による児童への就学義務、授業料の非徴収に象徴される国家による就学保障が促進され、就学率も明治33年には90%を超えたことが説明されました。

しかし、そうした中で地方を見ると、拒否や忌避をしていた事実があったということです。その理由として、急激な資本主義化により国民の生活が悪化した状況もあり、子どもの貧困、疾病・感染症、児童労働などにより、不就学の問題があったそうです。

これらをまず、都市スラム化が起こった東京市に着目して、学校や教師がどのように向き合っていたのかを多数の貴重な写真を通して説明されました。放置された子どもに対しては、授業料無償や学用品の給付とをすることで、就学と学習のニーズに応えていきました。また、

学校や教師は、不衛生で劣悪な環境による深刻な健康問題にも対処し、理髪、入浴などにまで取り組み、生存と発達を守る機能としての役割も果たしていたそうです。

次に私たちの身近な地域として、明治期の岐阜県における状況と学校や教師の取り組みを挙げられ、濃尾震災による被害や教育復興、山間地農村の子どもの生活実態、労働児童、多様な学習困難児などへの教育的対応などを紹介されました。

そして、現代社会にも、子どもの貧困化や教育格差の拡大、コロナ禍での多くの問題や課題もあることから、子どもを守るためにも、学校や教師の意義や役割が問われ始めていることを話され、歴史から学んでいくことも大切ではないだろうか、と問いかけをなされました。

岐阜地域の当時の様子や小学校の写真もあり、取られた地域の人物なども多数紹介を下さり、身近な地域が題材でより興味深く学ぶことができ、受講生の方々は熱心にメモを取り、真剣な眼差しで聞き入られていました。

受講後の質疑応答では、「就学における『学』の意味について」「教師の質や制度について」「教師の働き方について」「明治教育の中心者について」など、多数の質問や教師に対する感謝などが話されました。その問いに対して石井先生は、私たちにも理解しやすいように、レジюмеを確認しながら一つ一つに丁寧に解説を下さいました。国や地方自治体の取り組みとともに、我々地域の大人や教師が「どのように子どもに向き合うか」「向き合えるか」をあらためて考えることのできる質疑応答となりました。

講座後も、受講生の方々が笑顔で先生を囲んでいらっしゃる姿を見て、今回の講座内容に対する地域の方々の子どもに対する熱い思いと研究職の熱い思いが伝わってくる貴重な時間を感じ、現代の子どもに関する問題を共に考え、共に育てていくといった、「しなやかに生きる」考え方を身につける一助となった講座でした。

(文責：長瀬 啓子)

第6回 世界に飛び立つ岐阜の飛行機

講師：アンドリュー デューア（本学教授）

12/2（金）13:30～15:00

大正から第二次世界大戦を経て現在に至り岐阜県は日本の航空産業の中心的な存在になっています。各務原の重工業から岐阜市や美濃市の個人の活躍まで、岐阜県で生まれた飛行機は世界中に羽ばたいています。

全ての始まりは明治9年にあります。陸軍は大砲の射

的場建設のための用地を探しており、岐阜県稲葉郡に広がる各務原台地を選びました。

各務原台地は水利が便利だが、水はけが良すぎるなど土質が悪く農耕地に不向きということで江戸期より集落がすでに大砲演習場として使われ、明治3年にも大砲の試射の実績がありました。

大正3年に、第一次世界大戦がヨーロッパで勃発しました。飛行機はすぐに兵力として導入され、戦況に大きく影響していました。それを見た日本の陸軍省は航空戦力を強化することを決めました。戦争で初めて飛行機が使われたのが、1911年頃です。日本が強い国になるには航空機が必要ということで飛行機の開発が始まりました。

飛行機を日本では初めて飛ばした日本人二宮忠八は陸軍の看護兵をやっていたが飛ぶことに興味がありました。聴診器の管や輪ゴムなどを使って模型飛行機を作り、これは軍に役立つと、長岡外史大佐に提案したが却下されました。

陸軍中央部はすでにあつた所澤陸軍飛行場に次いで、各務原陸軍演習場を飛行場として転用することを決めました。各務原はもう一つの利点がありました。伊吹山に守られ、穏やかな一定した風に恵まれています。

演習場周辺の用地を買収し、鶴沼や那加などの村人を動員して、飛行場の建設に取りかかりました。大勢の人が各務原に住むようになりました。大正6（1917）年6月16日、1,175,576坪（約400ha）の各務原陸軍飛行場が完成しました。当時は草原から離陸着陸していたため、今のような整地された滑走路ではありませんでした。そして飛行学校も隣接されました。

大正5年に、川崎造船の松方社長は欧米の造船、自動車、飛行機などの産業動向を視察するために海外に遠征しました。自動車と飛行機の将来性を強く感じたので、自動車科と飛行機科を設置し、製作の準備にかかりました。

飛行機を作る為には、神戸の本社近くでない飛行場が必要でした。陸軍各務原飛行場の隣接地に飛行機組み立て工場を作りました。川崎航空機の原点です。

川崎造船の飛行機科の最初の仕事は、フランスのサルムソン2A2機をベースに陸軍乙型一型偵察機という国産機を作ることでした。当時、フランスの航空技術は世界最先端でしたので、60人のフランス空軍将校団を呼んで、航空技術の導入教育を始めました。

三菱重工業も各務原飛行場と深い関係がありました。その頃三菱の工場は名古屋の海岸にありました。飛行機を作り始めた当初は300メートルの滑走路がありました

が、飛行機が進歩することにつれて、長さが足りなくなり、限界に来ていました。

戦後の小牧空港の建設まで、三菱の試作機は汽車で岐阜駅まで、そして牛車で中山道をたどって各務原飛行場まで運ばれていました。

現在は岐阜基地の空港の隣に、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館があります。軍用機はもちろん、世界で一機しかない実験機など、大変珍しい飛行機がたくさん展示されています。

さらに岐阜県は模型飛行機でも有名です。岐阜市の江崎模型、美濃市にある Yoshida 模型、各務原市にあるファルセット社は活躍しています。

江崎模型は江崎ティッシュという優れた模型飛行機用の和紙のため世界中で有名な飛行機模型店です。美濃市にある Yoshida 模型は二宮忠八の模型を作りやすく再現して売っています。各務原市にあるファルセット社は、日本のお城のペーパークラフトキットなどのほかに、紙飛行機のキットもたくさん制作しています。

講師の作った紙飛行機の制作本が主にアメリカで出版されているので、日本の紙飛行機はこの各務原から世界へと羽ばたいていると言えます。

飛行機が作られるようになった歴史やエピソードなどを、飛行機や飛行場、飛行機製作工場などの貴重な写真と共に紹介され、講師の飛行機に対する知識の豊富さやその情熱が伝わりました。地元である各務原が日本の航空産業の発展に大きく貢献してきたことをお話され、地元各務原を大変誇らしく思え、受講者にとっても大変有意義な時間になったと感じました。

(文責：内田 恵美子)

第7回 ショスタコーヴィチ最後の交響曲を聴く

講師：菅野 道雄（本学教授）

12/16（木）13:30～15:00

令和4年度第7回公開講座(受講者39名)が12月15日に本学図書館大セミナー室で開催されました。

今回の講師である人間関係学部子ども発達学科の菅野道雄先生は、本公開講座の講師を2016年度から続けて下さっており、毎回好評な講座で楽しみにしているとおっしゃる声をお聞きます。今回も全7回講座の最終回で多くの方が熱心に学ばれました。

菅野先生は、音楽を専門とされ、文部科学省の検定教科書なども執筆されています。本学では「音楽科指導法」

「子ども音楽療育」関連科目、教養科目「音楽」などを学生に教授され、小学校や幼稚園教諭をはじめとした教師・専門職の養成にも携わっておられます。

今回の「ショスタコーヴィチ最後の交響曲を聴く」と題された講演は、旧ソ連の体制下で、幾度となく批判を受けながら復活し、20世紀最大の交響曲作家となったショスタコーヴィチにスポットをあてたものでした。

ショスタコーヴィチ(1906～1975)は、旧ソ連を代表する作曲家であり、20世紀最大の交響曲作家のひとりです。18歳の時にサンクトペテルブルク音楽院の卒業作品として交響曲第1番を作曲し、1971年の最後の交響曲まで15曲の交響曲を残しました。

しかし、その作曲生活は順風満帆だったわけではなく、1936年には共産党機関紙「プラウダ」に、歌劇「ムツェンスク郡のマクベス夫人」とバレエ「明るい小川」を批判する社説が掲載されました。これは、レーニンに替り権力を握ったスターリンが、「社会主義国家建設にふさわしい、民族主義的な音楽」を作曲することを作曲家たちに求めたことによるもので、この「プラウダ批判」を乗り越えるため、政府が求める社会主義を賛美する内容である「社会主義リアリズム」の路線に従った作品を書き続けたということです。

また、第2次大戦後、戦争の勝利を祝うために作曲した交響曲第9番は、壮大な作品を期待した当局に失望を与え、1948年には、「ジダーノフ批判」が起りました。これは、文化、芸術に対するイデオロギーの統制であり、国内の多くの作曲家が批判の対象となり、プロコフィエフやカバレフスキーらも公職から追われたそうです。ショスタコーヴィチは、名誉回復のため、オラトリオ「森の歌」など、社会主義リアリズム色の強い作品を書いて当局に迎合する一方、交響曲は、スターリンが死ぬ1953年まで書かれなかったそうです。

その後は、「雪解け」の時代となり、それまで封印してきた交響曲第4番の初演や、13番、14番といった大作の交響曲が書き進められてきたことが示されました。

今回DVDで鑑賞した「ショスタコーヴィチ最後の交響曲」は第15番になります。

病気がちになっていたショスタコーヴィチが、自らの子ども時代からの人生を振り返るものとなっているともいわれ、息子であるマクシム・ショスタコーヴィチは、指揮者として、父親の交響曲第15番の初演(1972)を指揮したそうです。この交響曲は、13・14番が声楽付きの大規模な交響曲だったのに対して、古典的な4楽章の2管

編成のオーケストラのための作品になっていることが説明されました。各楽章には様々な作曲家の作品引用があり、第1楽章は *Allegretto* で、ロッシーニの「ウィリアムテル序曲」の行進曲が繰り返し登場し、第4楽章は *Adagio-Allegretto* で、ヴァークナーのいくつかの作品のメロディが出て来るとのことでした。

ミヒャエル・ザンデルリンクの指揮するドレスデン・フィルハーモニーの演奏を鑑賞しましたが、ショスタコーヴィチが生きた時代の中での芸術について、戦争によるドレスデンの劇場の変遷なども話され、作品の背景などを深く考えながら鑑賞できるきっかけとなりました。打楽器が多く使用され、非常に印象に残る楽曲で、講座を聞きに来られた方々も多くを感じ取られた貴重なお時間だったようで、熱心に鑑賞されていました。

受講後の質疑応答では、「ショスタコーヴィチがこの交響曲第15番をイ長調とした理由」が質問されました。その問いに対して菅野先生は、私たちにも理解しやすいように、この作品には、他作曲家の作品引用や、自作の交響曲第4番の引用など、自身の音楽的回想とした交響曲でもあることを話されました。また、ショスタコーヴィチの音楽は調性的でありながら、無調的な主題を用いることも多く、十二音技法を自由に使った音列技法などを用いたりしていることも解説され、Aの音は一番基本的な音であることも学びました。

菅野先生は、「ロシアによるウクライナ侵攻があり、プーチンとスターリンがなぜか重なって見えてしまい、すぐにショスタコーヴィチを思い浮かべた」また、「しなやかさというのは、曲げても折れずにまた戻るような柔軟さ、それは簡単には屈服しないしたたかさでもあるように思います」と答えました。先生の講義から当時の社会情勢、そして、現在の世界平和を考えるものとなり、年末の最終回講座として、深く考える時間となった講座でした。

(文責：長瀬 啓子)

A Resiliant Lifestyle : Hints from the University
— Tokai Gakuin University and Tokai Gakuin University School
of Junior College Division 2022 Open Lectures —

University Social Contribution Committee

Abstract

This university offers a series of open lectures every year, organized by the University Social Contribution Committee and held in the university library. Each lecture is given by a faculty member. The overall theme asks participants to think about aspects of their lives they have begun to take for granted, and each individual lecture presents a topic of general interest related to the lecturer's field of research. Brief resumes of each lecture have long been posted to the university's home page, but since the topics relate to faculty research, they have been included in this year's research report.

Keywords : Open lecture, SDGs, Rwanda, Health Promotion, Hate Speech, Brain Science,
Communication, History of Education, Aircraft, Shostakovich